

谷崎潤一郎と芥川龍之介による「支那」の表象

— 紀行文を中心に —

陳 玫 君

(2003年9月30日受理)

The expressions of China by Tanizaki Junichirou and Akutagawa Ryunosuke

— Focusing on their travels —

Chen Mei-chun

In the Taisho era, a lot of authors and journalists visited China, and they published their experience as travels or articles to the world. Tanizaki Junichirou and Akutagawa Ryunosuke are also two of them. Comparisons between Tanizaki and Akutagawas' travels are made in this paper, especially for the expressions of China which hasn't been discussed so far.

Key words: China, nostalgia, river district, modernization

キーワード：支那，郷愁，水郷，近代化

1. はじめに

1918年(大正7年)10月からまる2ヶ月、谷崎潤一郎は鉄道院発行のガイドブックを手にして、一人で中国各地を旅行している。この中国旅行において谷崎は日本を外部から見る「目」を獲得し、そして今まで親しんで来た中国の書物に描かれている中国の風景を自らの目で確認するチャンスに恵まれた。帰国後、谷崎は「秦淮の夜」(大正8年)、「蘇州紀行」(大正8年)、「廬山日記」(大正8年)などの紀行文のほかに、「西湖の月」(大正8年)、「天鷲絨の夢」(大正8年)、「美食倶楽部」(大正8年)などいわゆる「支那趣味」の小説を発表した。

一方、あたかも谷崎にバトンタッチされたかのよう
に、1921年(大正10年)3月芥川龍之介は谷崎とは逆
のルートで大阪毎日新聞社の海外特派員として上海に
渡り、約五ヶ月にわたって上海、南京、九江、漢口、
長沙、洛陽、北京、大同、天津をまわった。この旅か

らもたらされた紀行文「支那遊記」(大正14年)では
谷崎の作品が強く意識されており、いたる所で谷崎を
引っ張り出して比較している。これが原因で谷崎の見
た中国を論じるとき、芥川が見た中国は付き物のよう
によく比較される。

次に、二人の見た中国に対する従来の評価を見てい
きたい。川本三郎は、両者の見た中国を「現実より幻
想を大事にする佐藤春夫や谷崎潤一郎は中国大陸の悠
然たる汚れをむしろ逆転して美化してしまい、そこに
現実とは違った「空想としての支那」のユートピアを
構築していくのだが、理知的な芥川龍之介はそれがで
きず、現実の中国の汚なさばかりを指摘していくこと
になる¹⁾」との見解を示し、芥川の『支那遊記』は
谷崎のロマンチックな「支那趣味」に対するアンチテー
ゼと分析している。

吉岡由紀彦は「芥川龍之介の眼に映じた中国—『支
那遊記』・零れ落ちた体験—」において、「谷崎の小説
で芥川の紀行を比較している点など、始めから小説で
「支那趣味」に浸りきった谷崎に軍配をあげた²⁾」と
川本三郎の論の欠点を両者の比較基準の違いと谷崎へ
の鼻唄と指摘した。吉岡の言う通り、谷崎の小説を
芥川の紀行文と比較するのは公平さを欠けている。し
かし、この点に気づいた吉岡自身は小説対小説、紀行

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部
として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：水島裕雅(主任指導教官)、岩崎文人、町
博光、中村春作、三木直大(国際協力研究科)

文対紀行文のレベルで、芥川と谷崎を分析しなかった。しかも、「本章では、『支那遊記』に登場し、しかも芥川の訪中の前後二度訪中している谷崎一の観た中国との比較から、「芥川の観た中国」の独自性を浮き彫りにするという論法をとる³⁾」と吉岡自らの宣言に反して、彼の分析では谷崎の観た中国が欠落している。僅かに芥川が『支那遊記』における谷崎理解を頼りに、芥川がロマンティシスト谷崎とは違った中国観を目指していると述べるに止まっているのである。

野崎敏は、「『貴い大陸』の言葉」において谷崎の西洋崇拜、支那趣味、日本回帰などの時期的な変化を従来の論とは一線を隔してそれぞれが「異国の言葉」への志向による結果と解釈する。そのなかで、野崎は谷崎の中国体験の特色を照らし出すために、芥川の中国体験を比較対象にした。二人の中国観の違いは「他なるもの、異なるもの」の〈味〉を求める貪婪な欲望の旺盛さが谷崎をして谷崎たらしめるゆえん、谷崎と芥川とを分ける要素だった⁴⁾と解釈した。さらに具体的にいうと、野崎のいう、「他なるもの、異なるもの」は食欲、性欲、中国語の三つに絞ることが出来る。特に野崎が注目しているのは、中国語にある。「芥川の『支那遊記』は中国語という現実を素通りする点で、多くの日本文学者的な紀行と軌を一にする⁵⁾」とあるように、谷崎の支那体験と他の日本文学者的な違いは中国語に対する欲望の強さにある。この論の妥当性はまだ議論する余地があるが、言語という視点で谷崎の各時期の変化に統一的な視点で見るところは、独創性がある。

西原大輔はサイドのオリエンタリズムの観点から谷崎の作品における「支那趣味」をみる。彼はサイドのオリエンタリズムを援用しながら、「オリエンタリズムとは、植民地主義あるいは帝国主義を前提とした、帝国による、被支配国並びにこれに類する地域に関する言説で、西洋のみならず日本にも適応可能な概念⁶⁾」と独自の定義を下した。西原が定義したこの概念は「帝国-被支配国」という二項対立な構図に囚われすぎる嫌があるが、この概念を谷崎に当て嵌めた場合、西原は、すでに当時の中国を日本の被支配国と見なしていることになるし、谷崎の数多くある支那趣味作品の個別性を無視していることにもなる。それらの言説を一律に「オリエンタリズム」の産物と決めつける結果は、谷崎を帝国主義に協力するオリエンタリストに仕立て上げることになる。もちろん、「オリエンタリズム」の視点から谷崎の作品を読む西原の論の有効性は否めない。ただ、谷崎の作品における前近代の日本への懐かしさは、単なる「オリエンタリズム」の一言で解決できる物ではないと思われる。これを解決

するには、「オリエンタリズム」という同一的な視点ではなく、作品に即して、それぞれに含まれたメッセージを検証しなければならない。

本稿では、谷崎と芥川二人の中国に関連する作品を比較しながら、とりわけこれまであまり論じられてこなかった二人の紀行文における「支那」の表象から「旅行案内」および「紀行文」がいかに利用され、そこに当時帝国日本の中国に対する欲望が反映されているかどうかを探ってみたい。

2. 束縛された眼界—「旅行案内」と紀行文

大正期には谷崎と芥川のように中国に遊び、紀行文学を残している文学者や知識人達がたくさんいる。

こうした紀行文学が大量に作り出された背景としては、第一次世界大戦の勃発によって沸き立った日本帝国の一時的な景気から生じた旅行ブームという点がまず考えられる。また、それに加えて鉄道の整備、ツーリズムの成立及び1910年の日韓併合も紀行文学創作熱に拍車をかける。特に日露戦争によって勝ち取った戦利品の「満鉄」と従来の朝鮮半島縦断鉄道である朝鮮鉄道とが直接連結した事によって、いわゆる朝鮮・満州ルートによる日本と中国の連絡運輸が益々容易になった。これらの現象と連動して中国紀行文学の誕生が促されたと思われる。

さらにもう一つの理由としては「若き支那の面目を観察」することが挙げられる。柄谷行人は「大正批評の諸問題 1910~1923」⁷⁾の中で日露戦争後日本社会から消えたものとして「西洋に対する緊張」と「中国或はアジアへの意識」を挙げているが、中国や朝鮮のことが再び意識にのぼってくるのは、第一次大戦後を待たなければならない。しかもそれは、「五・四運動とか三・一運動のように、向こう側から出てくる」ものであり、それまで中国に対して何の意識も持っておらず、大正デモクラットまでもが「日本帝国」を自明視していた。つまり、大正9年5月、日・英・米・仏の4カ国の銀行家からなる中国に対する借款団への中国からの激しい抵抗に直面することにより中国は初めて日本に「他者」として意識され、謎めいたイメージをもって立ち現れるのだ。大正10年3月31日の『大阪毎日新聞』には「支那印象記／新人の眼に映じた新しき支那／近日の紙上より掲載の筈」という見出しの記事が下のように載った。

支那は世界の謎として最も興味の深い国である。旧き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき

支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラッセル氏やデュイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越へて来ようとするのも、やがてこの点に心を牽かるゝに外ならぬ。吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り尽した後は、やがて春を求めて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の観たる支那が、如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本篇に依つてのみ見られよう⁸⁾。

このように中国に対する知識も列強に遅れてはいけなと新聞紙上で喧伝されている。

こうした中でさまざまな作家や記者が盛んに訪中し、その見聞を紀行文なり新聞記事なりという形でジャーナリズムに発表するようになる。芥川もその中の一人で前述したように大阪毎日新聞社の海外特派員として中国に向かったのである。

1910年（明治43年）の日韓併合以降、「日支」間の近代ツーリズムは新たな展開を迎えた。「満鉄」と朝鮮鉄道とが直接連結する事になってから、満鮮經由の大陸旅行コースが整備されはじめ、大正期半ばごろには大陸旅行のコースがほぼ定着した。第一次世界大戦の勃発によって沸き立たされた日本帝国の一時的な景気による金銭的な余裕、また、それに加えて新しく成立したツーリズムの機運にともない、旅行者の旅行先に対する情報を得たい気持ちを満たすため、大正期には「旅行案内」の刊行も盛んに成されている。たとえば鉄道院が1919年（大正8年）に発行した『朝鮮満州支那案内』は、その緒言において「近時本邦内地と鮮満支那方面との交通益々密接なるに連れ、該方面に対する案内書の必要愈々急ならむとするの趨勢あり。乃ち本書は此の要求に応ずべく此に其の首途第一歩を試むるもの⁹⁾」とその刊行目的を明示している。

1918年（大正7年）に中国を訪れた谷崎も鉄道院発行のガイドブックと地図によって旅行したのである。彼の「支那旅行」には、その時辿った路線を次のように書いてある。「朝鮮から満洲を経て北京へ出、北京から汽車で漢口へ来て、漢口から揚子江を下り、九江へ寄つてそれから廬山へ登り、又九江へ戻つて、今度

は南京から蘇州、蘇州から上海へ行き、上海から杭州へ行つて再び上海へ戻り、日本へ歸つて来た¹⁰⁾」というルートである。谷崎の当時手にしたガイドブックが何時刊行されたものかははっきりとは示されていないが、前掲の1919年（大正8年）に発行された鉄道院の案内書の緒言によると、それは鉄道院初の日本語案内書であることが分かる。それまで発行されたものはすべて欧米観光客をターゲットにした英文の東亜案内書である。この日本語版では英語版の第1、第4巻の所載地方が一部含まれている外になお第5巻南洋篇の一部も包括されている。

この鉄道院発行の「朝鮮満州支那案内」によると、当時鉄道院では「日支周遊券」というものが発売されており、これにはすでに「二様の経路」¹¹⁾が指定されている。さきに触れた谷崎がとった経路はまさにこの「二様の経路」の前者である。また、案内書には「日支周遊券」にあわせて約2ヶ月の「周遊計画」まで用意してある。そこにはあらかじめ旅客の観光日程、見物する「名所」が定められている。たとえば、「北京南京間（京漢線經由～十日間）」の日程は次のようなものである。

- 一日 北京發—鄭州に向ふ。
- 二日 鄭州着海蘭鐵路に乗換へ河南又は開封。
- 三日 河南又は開封より鄭州經由漢口へ。
- 四日 漢口（着後市内見物）。
- 五日 漢口滞在（漢陽及武昌遊覧）。
- 六日 漢口残部観光後—同夕發汽船にて大冶へ。
- 七日 大冶鐵鑛視察後—九江へ。
- 八日 九江（市内及び廬山又は南昌見物）。
- 九日 九江—午前發汽船にて南京へ。
- 十日 南京（早旦着後城内諸勝遊覧）。

以上の日程を谷崎の「廬山日記」（大正10年）と比較して検証してみると、谷崎が実際にとった日程とほぼ一致していることが分かる。まず、冒頭の部分には「（大正七年）十一月十日 晴。午前八時眼を覺ませば珍しくも空晴れたり。北京を發してより實に一週間目の青空なり」と書いており、そして二日目の日程を「明日はいよいよ太田氏と共に廬山に登らんとす¹²⁾」と記している。案内書が提示してくれた日程も北京を發ってから7日目に九江に着き、そして、その翌日が市内・廬山あるいは南昌見物という順番である。ここに明らかなように、谷崎は鉄道院が用意した「周遊計画」に従って中国旅行をした可能性が非常に高い。「廬山日記」における日程と鉄道院のガイドブックに載せてある日程の一致性は、ツーリズムが如何に旅客

の眼界を制限するかを意味する。不本意にもわれわれの想像力は束縛され、あるいは新たに作り出された「名勝」を知らず知らず受け容れてしまうのである。

3. 紀行文から見る谷崎と芥川

3-1 谷崎の「水」と「南方」への愛着

この旅行の間、谷崎は一般の観光客のよく出かける「朝鮮」や「満州」にはあまり感銘を受けた様子がない。また中国の北の風景よりも南方のほうを好み、中でも「南京、蘇州、上海」が気に入ったらしく「南へ来れば来る程、朝鮮や満州でお金を使ったのが惜しくてならなかった。今度は亦春にでもなつたらもう一遍支那へ行つて見よう¹³⁾」と「支那旅行」に書いている。実際彼が旅行後に書いた中国関連の紀行文や小説などは全部「水郷」といわれる中国の南を舞台にしている。しかも面白い事はすべての作品の中に「水」という要素が含まれていることである。

「蘇州紀行」(大正8年)には次のようなくだりがある。

私は天平山の紅葉なんかどうでもよい。寧ろ道中の運河の景色が目的なのである。殊に今日は日曜で上海から日本人の團體が紅葉見物に繰り込むと云ふ話であるから、そんな連中とカチ合つたりすれば何だか瀧の川へ遠足にでも来たやうな気がして面白くなからうし、成るべくなら紅葉の方は好い加減にしたいものだと思ふ。兎に角今日船を雇つたのは成功であつた。陸を行けば否でも應でも其の連中と一緒にならなければならない¹⁴⁾。

引用文にある「天平山の紅葉」見物は鉄道院の『朝鮮満州 支那案内』が用意してくれた観光名所の一つである。周知の通り「瀧の川」は東京の王子にあって秋の紅葉で有名である。この「瀧の川へ遠足にでも来たやうな」風景、日本で見慣れている風景をなぜ観光名所として指定する必要があるのか。徐己才は「もう一つの「内地」からの便り—大正期における「旅行案内」と朝鮮旅行」において「旅行案内」に紹介される朝鮮の「桜の風景」を次のように分析している。

桜の風景は「内地人」にとっては情緒的に安心感を抱かせる。そして旅行の淋しさを慰め、日本人としての自覚を触発するものとして作り上げられる。桜の風景は日本の「国民性」と通じるものとして考えられ、「内地人」が朝鮮に移住することに伴って植樹されていくことで、桜の風景も次

第に増えていく¹⁵⁾。

もちろん、この「天平山の紅葉」と当時日本の「新内地」となったばかりの朝鮮にある「桜の風景」を全く同一視してしまうことは乱暴すぎるかもしれない。しかし、その「情緒的に安心感を抱かせる」と「日本人としての自覚を触発する」とことは通じるものがあると思われる。というのは「春には桜、秋には紅葉」というようなごく普通の風景、すべての日本人に親しまれてきた風景以上に「日本人としての自覚」を呼び起こすシンボルはないと思われるからである。天平山が観光名所として選ばれたのはまさにこの「紅葉」及び「瀧の川へ遠足にでも来たやうな」親近感によるのではなからうか。

谷崎に3年遅れて春に中国を訪ねた芥川龍之介の「上海遊記」には「日本人」という題で海外にいる日本人と桜について次のように語ったくだりがある。

上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行つた時、氏の社宅の前の庭に、小さな桜が植わつてゐた。すると、同行の四十起氏が、「御覧なさい。桜が咲いてゐます。」と云つた。その又言ひ方には不思議な程、嬉しそうな調子がこもつてゐた。玄関に出てゐた小島氏も、もし大袈裟に形容すれば、亜米利加婦りのコロムプスが、土産でも見せるやうな顔色だつた。その癖桜は瘦せ枯れた枝に、乏しい花しかつけてゐなかつた。私はこの時両先生が、何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。しかし上海に一月程ゐると、これは両氏ばかりぢやない、誰でもさうだと云ふ事を知つた。日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、桜の花さへ見る事が出来れば、忽幸福になる人種である。

同文書院を見に行つた時、寄宿舎の二階を歩いてゐると、廊下のつき当たりの窓の外に、青い穂麦の海が見えた。その麦畑の処処に、平凡な菜の花の群つたのが見えた。最後にそれ等のずつと向うに、一低い屋根が続いた上に、大きな鯉鱈のあるのが見えた。鯉は風に吹かれながら、鮮やかに空へ翻つてゐた。この一本の鯉鱈は、たちまち風景を変化させた。私は支那に居るのじゃない。日本に居るのだと云う氣になつた。しかしその窓の側へ行つたら、すぐ目の下の麦畑に、支那の百姓が働いていた。それが何だか私には、怪しからんやうな氣を起こさせた。私は遠い上海の空に、日本の鯉鱈を眺めたのは、やはり多少愉快だつたの

である。桜の事などは笑へないかも知れない¹⁶⁾。

引用文にある小島氏と四十起氏の喜び振りからも桜の風景がいかに異国にいる彼らに情緒的に安心感を抱かせるものかが分かるだろう。こうしたツーリズムの視線のもとで、中国に点在する「日本の〇〇」のような景観が「発見」され創り出されていく。日本人を「桜の花さへ見る事が出来れば、忽幸福になる人種」と揶揄した芥川だが、彼もやはり鯉鱗など日本の典型的な風景が上海に移植されることを「やはり多少愉快」と愛国心を露わにしている。何気なく発された芥川のこの一言には、異国の土地に自国の勢力が伸張していく様を愉快に感じる芥川の心底の沈潜している、帝国日本の一員としての中国の領土に対する欲望が読み取れるのではないかと思う。

また、上に触れた谷崎の「蘇州紀行」には、「陸を行けば否でも応でも其の連中と一緒にならなければならない」とあるように鉄道院の指定した経路に従えば、谷崎は「水郷の情趣」は味わえるはずがなかった。なぜなら、その「周遊計画」にはあらかじめ見物する「名勝」が定められているからだ。もちろん、その交通手段は近代的な「鉄道」である。しかし、谷崎は「制度」としてのツーリズムに乗せられつつも、伝統的な水路を使って中国の江南にある「水郷」にアプローチしている。

劉建輝によると、明治後半からそれまで無視されてきた「県城」及びその背後にひかえている「水郷」に関心を示す人たちが現れ始めたという。つまりそれまでは中国に渡った人々の関心は「租界」という欧米に作られた「上海」にしかなかったのだ。それがここに来て中国の「水郷」に関心を示す人々が現れるようになった点について、劉は次のように述べている。

このような現象が生まれた背景として、一つには、すでに「近代国家」の道を30年以上も歩み自らも「列強」の一員となった明治日本人の「近代人」としての「余裕」があげられる。もう一つの背景としては、およそ1888年以降の東京市区改正事業のなかで東京の伝統的な都市景観が急速に崩壊していたこともあるだろう。とりわけ隅田川以東の江東地区一帯に、印刷や金属加工、雑貨品などの製造工場につづいて、大規模な紡績工場が登場するにしたがって、在来の隅田川兩岸の「江戸情緒」はほとんど消滅してしまった。上海に来た一部の人は、この依然として伝統的な景観を保持している郊外の「水郷」にかつての隅田川の「幻影」をみつけようとしたことが考えられる¹⁷⁾。

つまり、この時期現れる「水郷」への関心は、失われた「隅田川」への懐古の情からもたらされたのだ。東京は近代化が進むにつれて都市構造や交通の体系に大きな変化をもたらした。とくに、鉄道の発達によって〈水〉から〈陸〉への転換が起こり、都市空間のあり方に大きな影響を与えたのである¹⁸⁾。水辺は次々と埋め立てられ、公共建築、工場あるいは大倉庫などに追い出され、都市の周縁へ周縁へと追いやられていった。町人の通う茶屋、料亭が並んで風光明媚な遊興空間が大正期には急速に失われていった。

私は一體山國よりも水郷の景色を好むせるか、殊に町の中なぞを流れて居る河の景色を好むせるか、此の一日の遊びで、蘇州がすつかり気に入ってしまったのである。運河の景色があまり気に入ったので、第三日目には天平山の紅葉を見がてら、更に畫舫を備つてもう一遍ぐるつと運河を漕ぎ廻ることにした¹⁹⁾。

と谷崎は「蘇州紀行前書」に書いているが、彼の蘇州に対する思いもこの失われた「隅田川」への郷愁から来るのだと思われる。

谷崎のこの「畫舫」で「水郷」へアプローチする行動を取り上げて劉建輝は、制度としてのツーリズムに乗せられながらも巧妙にそれを突き破って、自らの大陸景観を発見したと賞讃する²⁰⁾。だが果たして谷崎は本当に制度としてのツーリズムを突破したと言えるだろうか。「蘇州紀行」²¹⁾には随所に中国の風景を日本の風景として見立てる部分がある。たとえば、「中国の〇〇は日本の〇〇のようである」という例がたくさん出てくるので、そのいくつかを挙げてみよう。

- (1) 平山の麓へ着いたのは午後一時頃であつた。そこには数頭の驢馬や駕籠の外に、純支那式の風雅な輿が五六台も客を待つてゐた。一体に、蘇州の輿は北京や南京辺のよりもずつと上品に綺麗に出来てゐる。何となく日本の王朝時代の乗物に髣髴としてゐて、それが静かに練つて来るのに出で遇ふと、いかなる佳人が乗つてゐるのかと、奥床しい心地がする。(p.231)
- (2) 天平山と云ふ山は、山と云ふよりも山の模様と云つた方がいゝくらゐに可愛らしい。無論東京の愛宕山ほど小さくはないが、武州の高尾山なんかには比べればずつと低い。(中略)全体が玩具のやうに小規模である。(p.231)
- (3) 五湖とは太湖の事であつて、あの山の頂に登れば、比叡山から琵琶の湖を瞰下すやうに展

望する事が出来るさうである。(p.236)

- (4) 清水の塔が京都の附き物であるやうに、虎丘の塔は蘇州城の附き物であるとも云へる。(p.238)
- (5) 運河はそれ等のアーチを潜つて、次第に細くはるばると遠い野末に消えて行く。河上の方には兩岸に一叢の灌木の林があつて、水はその林の枝葉の下に隠れてしまふのであるらしい。此方から眺めると、林のあるあたりがいかに清い美しい仙境のやうに感ぜられる。お伽噺のお爺さんやお姫さんの住んでゐる村は、きつとあゝいふ所にあるのではないか知らん。さうして、桃太郎の桃の流れて来る川は、大方こんな川だつたらうなどと思ふ。(p.228)

「支那」の風景を一個一個「日本の風景」に譬える表現から、谷崎の「蘇州」に対する感動は、「蘇州」の中に「日本」を発見する快感に基づいて生じたものと言えるのではないか。芥川も「新芸術家の眼に映じた支那の印象」(大正10年)で、「支那」南方の風景をこう語っている。

上海は何かしら騒々しく、人間でもソワソワして実に忙しい。それに北方へ来ると一般に静かで人間にしても落ち着きがあつて実に大陸的な気分が自然の裡に味はれました。南方では蘇州も杭州も南京も漢口も見ましたが、矢張一番気に入つたのは蘇州の景でした。然し凡て南の風景は唯美しいと云ふに過ぎません。丁度日本の景の夫れに似て比較的支那の気分が薄かつたのであります。其の点では谷崎潤一郎君とは趣を異にして居ります²²⁾。

以上の引用文から二つのことを知ることができる。一つは「支那」南方の風景と日本の風景が似ている事である。もう一つは谷崎がその類似性を求めにきた事である。「支那」の国土を「日本」として、享樂の対象として発見し直し、日支の風景との類似性を強調することにより両国の境界線は段々薄くなり、延長されていく。特に(五)の引用にある「桃太郎」という昔話にある一場面を蘇州の運河に重ねてみる視線は鐵道院など帝國日本を代表する立場の機関の視線と同調している。

3-2 芥川の政治と人物への関心

中国の現状を置き去りにし、谷崎の紀行文では「水」の文化への郷愁の感が満ち溢れている。中国の風景から谷崎は昔の日本を見出している。これに引き換え、

芥川の紀行文では中国の風景に対して賞賛の言葉よりも失望や皮肉な言葉で罵倒するものが多い。彼の関心はあくまでも市井の中の庶民の生活にあり、列強に蚕食されつつある中国の現状にある。谷崎と徳富蘇峰が「西湖」の美を描くのに対して芥川は下の引用文のやうに顧みもしない。

青々と枝垂れた槐の下に、このハイカラな支那人の家族が、文字通り嬉嬉と飯を食ふ所は、見てゐるだけでも面白い。私は葉巻へ火をつけながら、飽かずに彼等を眺めてみた。断橋、孤山、雷峰塔、一それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである²³⁾。(下線引用者、以下同じ)

西施や范蠡は幼少の時に、呉越軍談を愛読した以来、未だ私の鼻根役者だから、是非さう云ふ古蹟を見て置きたい。一と云ふ心持ちも勿論あつたが、実は社命を帯びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や美人に縁のある所は、一つでも余計に見て置いた方が、万事に好都合ぢやないかと云ふ、さもしい算段もあつたのである。この算段は上海から、江南一帯につき纏つた上、洞庭湖を渡つても離れなかつた。さもなければ私の旅行は、もつと支那人の生活に触れた、漢詩や南画の臭味のない、小説家向きのものになつたのである²⁴⁾。

そこで芥川が見たものは西洋列強に植民地化されつつある中国の現状だった。それは下にあげた一節にも現れている。

玄関の外には門の左に、玫瑰の棚が出来てゐる。我我はその下に佇みながら、細かい葉の間に簇つた、赤い花を仰いで見た。花は遠い電燈の光に、かすかな匂ひを放つてゐる。それが何だかつやつやと、濡れてゐると思つたら、何時の間にか暗い空は、糠雨に変わつてゐるのだつた。玫瑰、微雨、孤客の心、一此処までは詩になるかも知れない。が、鼻の先の玄関には、酔つ払ひのヤンキイが騒いでゐる。私はとてもこの分では、「天鷲絨の夢」の作者のやうに、ロマンテイツクにはなれないと思つた。

(中略)

ロマンテイズムよ、さようならである。私は陶然たる村田君と、人気のないサロンへ引き返し

た。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら²⁵⁾。

ここで注目すべきことは、芥川の紀行文にある列強批判は自国の日本へは向けられていなかったことである。同じ天平山を訪ねた谷崎はもっぱら水の風景に目を奪われるのに対して、芥川は天平山の白雲寺の壁に書いてある排日の落書きに興味を持っている。しかし、彼はそういう落書きを書いた中国人たちの感情を無視し、それを単なる喧嘩の負け惜しみと解釈した。そればかりか、芥川はそれらの排日の落書きを「日本の商品を駆逐する」ための手段なら寧ろ安い広告費と揶揄する。

天平山白雲寺へ行つて見たら、山に倚つた亭の壁に、排日の落書きが沢山あつた。「諸君爾在快活之時、不可忘了三七二十一条」と云ふのがある。「犬与日奴不得題壁」と云ふのがある。(尤も島津氏は平然と、層雲派の俳句を題してゐた。)更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁。何來不共戴天仇。恨無十萬橫磨劍。殺尽倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。何でもこの詩の前書きには、天平山へ詣でる途中、日本人と喧嘩をしたら、多勢に無勢のため負けてしまった。痛憤に堪へないなどと書いてあつた。聞けば排日の使唆費は、三十万円内外とか云ふ事だが、この位利き目があるとすれば、日本の商品を駆逐する上にも、寧ろ安い広告費である。私は欄外の若楓の枝が、雨気に垂れたのを眺めながら、若い寺男の持つて来る。抹茶臭い茶を飲んだり、固い棗の実を嚙つたりした²⁶⁾。

谷崎が「支那」の国土を「日本」として享樂の対象として発見し直すのに対して、芥川が中国に見たのは雰囲気や壊す「酔つ払ひのヤンキイ」たちと江南一帯の風景名勝を破壊する「赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建て」の西洋館だった。「支那」の土地に差別をもたらした「西洋」、支那の土地に西洋館を繁殖させる列強の植民地政策に向かつて芥川は「水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら」と述べている。この発言から明らかに中国を「他者」として見ておらず、そのまなざしは当時帝国日本のアジアへの膨張主義のまなざしを思わせる。実際、芥川の紀行文は明治期日本人の中国認識とさほど違わなかった。例えば、夏目漱石の『満韓ところどころ』にある中国のクーリーに対する露骨な差別的眼差しと全く同質的である。また、明治期からある「中国人はというのは国家的觀念、公共的觀念がなく、個人の利益、私利というものを徹底的に追求する、そのかわり、それは

すごいエネルギーを持っている²⁷⁾」という日本人の中国觀の共通概念は、侵略されながらも「老若を問わず、太平樂を唱えている²⁸⁾」という中国人を能天気な人種と決め付ける芥川の言葉に端的に現れている。中国の土地から欧米を駆逐するような発言をする芥川の考えは、芥川の「長江遊記」にも見られる。それは満州建國、台湾の植民地經營、關東州の植民地經營の思想にも通底しているものである。

4. まとめ

以上の検討から明らかになったように、私たちは、谷崎の紀行文から当時「旅行案内」がいかなる機能を有していたかを知ることができる。すなわち「旅行案内」は読者に外地の情報を提供するだけでなく、同時に読者の想像力を限定する機能をも有していた。また、「旅行案内」が用意してくれた「周遊計画」にしる「觀光名所」にしる、そこには膨張していく帝国日本との深い関わり合いが見られる。すなわち、鉄道院など帝国日本を代表する機関が指定する場所を觀光する事によって帝国国民としてのアイデンティティの形成が促されていくという関係が見られるのである。

ところで、明治30年代のツーリズムの想像力が日本国内に向かつて発されたものならば、大正期以降のツーリズムの想像力は朝鮮・満州・支那に向かつて発されたものといえる。このようなツーリズムの想像力の対象地域のシフトに伴い、「旅行案内」を通して帝国青年は外地の地理・歴史・文化情報を把握し、国民としてのアイデンティティを確立していくという新たな図式が成立することとなった。また、鉄道院という国家機関発刊の「旅行案内」のみがかかる役割を果たしたのではなく、図らずもこれを補完する役割を谷崎・芥川といった文人の紀行文が果たしていたといえる。すなわち、まず、谷崎の紀行文にある「日本発見」は図らずも日本と中国とを想像上に関連させ、その結果帝国日本の視線と同調している個所が随所に見られる。次いで、帰国後、彼が書いた中国関連の小説には政治とは全く関係なく中国を舞台にしながら東京下町の風景とも思わせる描写及び世紀末の要素で谷崎独自のロマンチックな美的世界を築きあげたものも見られる。

一方、『支那遊記』²⁹⁾で中国の不潔を軽蔑し、「西洋」の野蛮および列強の植民地主義を厳しく批判する芥川の視角には「日本」ははいっていなかったが、中国にいる「西洋」を追い出そうとする芥川の発言には、中国を「他者」と見ず自己の一部と見る帝国日本の膨張主義と似た趣がある。

このような二人の紀行文を通して、「支那」に対す

る日本の「内地」の人々は「支那」に対する好奇心や欲望を掻き立てられたと考えられる。そこから、文学者の文字を通して、より具体的な形で「支那」の文化や生活が表象されることによって「旅行案内」が補完されていたという関係を見て取ることができる。これは実際に旅行体験のある読者にしてもない読者にしても、著者の文字に追従して共に旅をしていくという紀行文の性質にも由来するといえる。その副次的結果として、共に日本国民としてのアイデンティティを確立していくという側面が立ち現れたといえるのではなからうか。

最後に、残された課題について指摘しておきたい。それは、当時、多くの旅行者によって「支那」や朝鮮、満州といった地域への旅行記が書かれているのであるが、たとえば「学生の作文」³⁰⁾といった形で書かれたそれと、谷崎や芥川といった文学者が書き記したそれとはどのように交錯するのだろうかという問題である。この点についてはまた場を改めて論じることとしたい。

【注】

- 1) 川本三郎「支那服を着た少女」『大正幻影』、筑摩書房、1997年5月、p.177。
- 2) 吉岡由紀彦「芥川龍之介の眼に映じた中国—『支那遊記』・零れ落ちた体験—」『作家のアジア体験—近代日本文学の陰面—』、世界思想社、1992年7月、p.104。
- 3) 同上、p.97。
- 4) 野崎歎「『貴い大陸』の言葉」『谷崎潤一郎と異国の言語』、人文書院、2003年6月、p.60。
- 5) 同上、p.70。
- 6) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』、中央公論新社、2003年7月、p.21。
- 7) 柄谷行人「大正批評の諸問題 1910~1923」『近代日本の批評Ⅲ 明治・大正篇』、講談社、1998年1月、pp.187-192。
- 8) 『大阪毎日新聞』1921年3月31日付。
- 9) 鐵道院『朝鮮満州 支那案内』、丁未出版社、1919年10月、pp.1-2。
- 10) 「支那旅行」『谷崎潤一郎全集 第二十三巻』、中央公論社、1969年3月、p.42。
- 11) 注9、p.総5。

二様の経路＝

(一) 前掲日支連絡経路表中の日本出発地より矢先の方向に従ひ、鮮満を経て北京に至り、夫れより京漢線に由て漢口に出で、日清汽船にて揚子江を下り、上海より日本郵船便に便り一路出発地に帰着するもの或は其の反路。

(二) 日本出発地より北京までは(一)と同経路とし、其処より天津に引返し津浦線に由て浦口、南京

に至り、滬寧鐵路經由上海に出で、以下又(一)経路の如くして出発地に復帰するもの—或は其の反路。

- 12) 「廬山日記」『谷崎潤一郎全集 第七巻』、中央公論社、1967年5月、pp.463-466。
- 13) 「支那旅行」『谷崎潤一郎全集 第二十三巻』、中央公論社、1969年3月、p.42。
- 14) 「蘇州紀行」『谷崎潤一郎全集 第六巻』、中央公論社、1967年4月、p.223。
- 15) 徐己才「もう一つの「内地」からの便り—大正期における「旅行案内」と朝鮮旅行」『日本文学』、日本文学協会、2000年3月、p.58。
- 16) 「上海遊記」『芥川龍之介全集 第八巻』、岩波書店、1996年6月、pp.56-57。
- 17) 劉建輝「谷崎と芥川—ツーリズムと大正作家」『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』、講談社選書メチエ、2000年6月、p.177。
- 18) 陣内秀信「水の都・東京」『東京の空間人類学』、ちくま文芸文庫、1992年11月、pp.253-272 参照。
- 19) 「蘇州紀行前書」『谷崎潤一郎全集 第二十三巻』、中央公論社、1969年3月、p.41。
- 20) 松村昌家編、劉建輝「オリエンタリズムとしての「支那趣味」」『谷崎潤一郎と世紀末』、講談社、2002年4月、pp.63-64。
- 21) 「蘇州紀行」『谷崎潤一郎全集 第六巻』、中央公論社、1967年4月。
- 22) 「新芸術家の眼に映じた支那の印象」『芥川龍之介全集 第八巻』、岩波書店、1996年6月、p.3。
- 23) 「九 西湖(四)」『江南遊記』、『芥川龍之介全集 第八巻』、岩波書店、1996年6月、p.338。
- 24) 「十七 天平と靈巖と(中)」『江南遊記』、同上、p.260。
- 25) 「五 杭州の一夜(下)」『江南遊記』、同上、p.225。
- 26) 「十六 天平と靈巖と(上)」『江南遊記』、同上、pp.256-257。
- 27) 小島晋治「明治日本人の中国紀行について」、『中国研究月報』第604号、中国研究所、1998年6月、p.34。
- 28) 「長江遊記」『芥川龍之介全集 第十一巻』、1996年9月、p.254。
- 29) 「上海遊記」「江南遊記」「長江遊記」「北京日記抄」「雑信一束」を一冊にまとめて『支那遊記』という題で1925年11月、改造社より刊行された。
- 30) 谷崎らの大正文人と同じ新しく起動したツーリズムに乗せられた学生が綴った海外修学旅行の感想文である。現存しているものは、広島高等師範学校著『満韓修学旅行記念録』、東洋文庫、1907年がある。ゆまに書店から復刊された『幕末明治中国見聞録集成』シリーズにも収録されている。

(主任指導教官 水島裕雅)